



新潟大学歯学部は、今

歯学部長 花田晃治

この原稿を打っている8月の時点で、歯学部長に就任して4か月が過ぎようとしています。まだ4か月しかたっていないのかという感じと、随分長かったな、という感じとが錯綜しています。それほどに大学改革の流れが急であると言えます。

今、新潟大学歯学部は、大きな改革を迫られています。これは歯学部構成員一人一人に考えていただくことであります。こうしたなかであって、私が考えていること、皆さんにお願いしたいことを述べてみます。

「学際的基幹大学としての新潟大学歯学部」「21世紀を生き抜く新潟大学歯学部」について：

文部大臣から諮問を受けた大学審議会は、1998年10月26日に、「21世紀の大学像と今後の改革の方策について 競争的環境のなかで個性が輝く大学」という答申を行いました。いわゆるピンク本として皆さんに配布されています。読んでいただけたでしょうか。私も難しいことばかり書いてあるなと思っていましたが、これをまとめた大学審議会のメンバーを見ると、大学長、大学名誉教授、大学教授、大学理事長、放送大学会長、科学技術会議、科学技術振興財団、富士ゼロックス、銀行相談役・頭取、電通社長、生命保険会社会長、アナウンサーなどで、私たちと同じ大学の教官も入っているわけです。そう思えばそれほど難しい話ではないなとなるわけです。

新潟大学では、この答申の出る前の1998年6月に「答申・中間まとめ」が公表された時以来、各

章ごとのワーキンググループにおいて、新潟大学の本来の在り方を討議し、本答申が出た時点で、まとめを行いました。このまとめ及びその執筆をされたのが前法学部長の山下教授です。7月7日に歯学部に来ていただいてFDとしての講演をいただきました。新潟大学は総合大学ですから、新潟大学のなかにもこうした先生たちがいるということは有利なことですし、心強いと思います。まとめの内容は「学際的基幹大学としての新潟大学日本と地域の未来のために」「21世紀を生き抜く新潟大学」、いわゆる緑本として皆さんに配布されていますので、目を通しておられると思います。どうでしょうか、一度は必ず目を通してください。なぜならば新潟大学の今後の改革は、この内容が全学で認められたものとして、この内容に沿って進められます。

私も一年間、学長補佐としてこの検討に関わってきましたので、かなり理解していると思います。ここでは、これらの内容を「学際的基幹大学としての新潟大学歯学部」「21世紀を生き抜く新潟大学歯学部」という観点から、もう一度みてみたいと思います。

確かに、大学はなによりも、まず研究機関であります。この点を一時も忘れてはならないということをおきたいと思います。私たちの行った研究が人類のこれまでの幸福に大きく寄与してきたことは誰もが認めのことと思います。新潟大学歯学部が行ってきた研究成果は、日常臨床において大いに貢献してきたといえます。この点は、今現在においてもはっきりと確認しておく必要があります。新潟大学歯学部において、在職し

ている皆さんは、開業の道を直接とるのではなく、研究という、苦しいながらも楽しい道を選択されたはずです。従って更なる研究成果を求めて研究に従事する姿勢が必要ですし、そのための研究環境の整備が必要です。ところが一方で、研究の高度化に対する研究組織の再編成、重点化は順調に進んでいるのでしょうか。必ずしもイエスではないように思われます。また他方において研究を重視し、それを追求する余り、大学が知性という財産、技術という財産を後世に正しく引き継いでゆくために必要な教育について、十分な努力がなされてきたでしょうか。自分は教育よりは研究に時間を割きたい。そのために大学に残っている。あるいは教育に時間をとられて研究ができないと教育を邪魔者扱いしてなかったでしょうか。

社会における大学の役割が問われている今、ここで新潟大学歯学部は研究を重視しつつも、教育、それに加えて臨床を等価値として認識するところから始める必要があるのではないのでしょうか。とって一人一人の構成員が、研究にも、教育にも、臨床にも時間を割くことは不可能だと思っておられるかもしれません。しかしながら、教育工学に基づいた効率的なカリキュラム編成、教育方法を確立すること、一人の患者さんを中心とした能率的な診療体制の確立等によって時間の有効利用があれば可能だと思いますし、可能にしなければなりません。それによって新潟大学歯学部は、現代の日本社会、新潟の社会にあって必須、必然の機関となると思います。

研究や学問について考えますと、近年、専門化し、先鋭化してきましたが、研究成果を社会に還元し、人類の幸福に役立てるためには、今一度、「総合化」の必要があると思いますし、それは学問的にいえば「学際化」であります。歯科医学における純粋な基礎的研究はもちろん必要です。しかしながらそれは研究の全体を占めるものではありません。かなりの研究は応用、専門のために行われています。その中でどれほどの研究成果が社会に還元され、国民の理解を得ているのでしょうか。学際化に向けてはいろんな道があると思いますが、まず私たちが考えなければならないのは、新潟大学という総合大学のなかであって、共同研

究等を通して、学際化をはかることも一つの道です。このことは「答申」のなかでいわれている国立大学の総合性に通じます。

工学部とはいくつかの教室が共同研究を行っています。これに加えて数学、物理、生物、化学といった理学部、食べることと大いに関係のある農学部、法学部、人文学部、心理学教室、学校との関係、教育学・教育工学といった関係での教育人間科学部、などなどたくさんの道が考えられます。従来の歯科医学、歯科医師を育てる歯学部だけでは不十分だと思います。

新潟大学歯学部は今まで、基幹大学型を取ってきました。それは学部の上に大学院が積み上げられている形態です。当面は基礎系専攻と臨床系専攻を改組し、口腔生命科学系大学院とします。その上で大学院の規模の拡大に重点を置くことに取り組みます。大学院の重点化です。そして将来的には、医学研究科とも連携をもちながら、生命科学系大学院が考えられます。その時に新潟大学大学院は、既存の自然科学系大学院、現代社会科学系大学院に加えて、生命科学系大学院の三つの柱が完成され、学際的基幹大学としての総合大学になりえます。

これからの新しい新潟大学歯学部にあっては、自己評価が必ず必要です。今後、国立大学が独立行政法人になるかどうか、いつなるのか、ということについては、まだ見えてない部分はありますが、独立行政法人について考えておく必要はあります。

独立行政法人について：

基本的には国立大学は、独立行政法人の精神に沿ったものになるでしょう。その目的の最大のものは、この10年間に25%の定員削減をはかるためには、突出して公務員の多い文部省関係が狙われています。25%の内訳は通常定員削減で10%、独立行政法人になることで削減されるのが15%です。ところが総合大学にあって、なんとか業績を上げ、独立してやってゆけるのは、ごく限られた部局でしょう。歯学部などの学部は非常に苦しいというよりは、やってゆけるでしょうか。といい

ますのは、歯学部にあつては、収入は学生の入学金、授業料と奨学寄付金、受託研究費と科研費ぐらいです。これで歯学部に要するすべての支出をまかなうのは不可能です。独立できる学部を中心に大学として存続し、独立できない学部は統合、廃止といった意見も出ています。ちょうど国鉄、日本電電公社がJR、NTTになっていった過程と同じです。歯学部が第三セクターとしてやってゆけるでしょうか。こういう思考過程ではなく、本来の歯学部の存在形態を探る努力が必要です。

既に文部省は、従来の講座研究費型から、科研費型へシフトを始めています。その例が、従来の科研費の審査を文部省関連学会の流れから、日本学術振興会“日本学術会議”研究連絡会議に今年から替えました。これからは科研費が主流になってゆくでしょうから、とりあえず科研費の申請を倍増してください。

独立行政法人にあつては、3年から5年にわたる業務運営に関する中期目標を立て、期間終了時には、評価委員会から業務の実績の評価を受けることとなります。こうした評価はこれまでの自己評価ではなしに、第三者による外部評価であります。この評価によって法人の存続まで問われます。予算配当はあるようですが、今までのように一律ではないでしょう。

時代は新しく、めまぐるしく変わってゆきます。一人一人が研究計画を立て、プロトコルを作成し、それに沿って研究をし、研究を期限以内に達成し、その研究成果が社会に役に立つものであるかが問われます。

教官は永久雇用ではなくなります。新潟大学においても昨年度に任期制の規程が制定されました。また、文系の学部にあつては、既に教官の任用には任期が定められていることがありました。3年とか、5年とかという一定期間のうちに研究成果を挙げなければなりません。歯学部にはそういう考え方はなじまないとお考えかもしれませんが、大学としては既に任期制の流れのなかにあります。

卒前卒後一貫教育：

少子化、国際化のなかで、護送船団方式から、個性化へ。

女性一人あたりの生涯出生児数が人口の置き換え水準である2.1を大幅に割っています。一組の夫婦が2.1人の子供を生んでいれば、人口は減らないという数字です。ところが最近では1.4ぐらいに落ちてきています。これが少子化となって現れています。近い将来には、希望する高校生が、大学を選ばなければ、全員入学できることとなります。入学試験はなくなるかという、こうなればかえって大学は選ばれるでしょう。すると選ばれない大学は定員割れ、成り立たないという道を進むしかありません。選ばれるための努力、それは新潟大学歯学部がどこにもない、特徴を持った歯学部になることです。大学の個性化です。個性化の一つかもしれませんが、国際化も必要です。今までのように、アメリカ、ヨーロッパから学ぶだけでは一面的でしょう。日本特有の学問とそれに基づいた臨床を育て、世界の研究者とディスカッションできる研究者が必要ですし、優れた臨床成果にアジアの人たちは注目しています。アジアの人たちともディスカッションし、そこで認められた、グローバルな臨床を患者さんが求める時代が来ています。ところがアジアのなかで英語が話せないのは、日本だけになってしまいました。これではアジアに出てゆくことすらできません。学生教育のなかでこういったカリキュラムを整備することが急務です。香港、フィリピン、タイ、インドネシア、シンガポール、マレーシア、韓国は勿論のこと、中国まで英語圏が広がりました。

学部教育と研究者としての意識・活動の分離：

学部教育では、教養教育・専門分野の基礎・基本重視により、専門的人材として活躍できる基礎的能力を養うことができるようなカリキュラムを構築する必要があります。高度な講義メニューを並べたから、後は学生の自主性に任せるといった状況ではありません。知的体系の一貫性に重きを

おいたカリキュラム編成（6年一貫教育）とシラバスに基づいた学生の自主的学習を可能にすることです。知識習得型から課題探求能力型への展開です。教授=教え授ける時代は終わりました。教授に必要なことは、その講義が歯科医学、歯科臨床のなかでどういう意味を持っているかという科目ガイダンスと教授がなにを考えて教育しているかを伝えることではないでしょうか。それによって学生がその学問にいかに関心をもつかでしょう。黒板に板書し、配布したプリントを読み上げる、学生はノートを必死になって取って、欠席した部分はコピーして、必死に暗記して試験を通る。こうした形態が余りにも長く続きすぎました。

今、少人数教育がよいと言われています。授業方法の改善が叫ばれています。そのためにはFD (Faculty Development) が必要です。今一度、現在行われている講義、実習の形態を分析し、新しい授業形態を構築しましょう。実習は技を磨くためでしょうか。実習は講義で得た知識を実際に試すことによってより理解を深めるためにあるのではないのでしょうか。

学生による授業評価が教養教育ですでに以前から行われていますが、歯学部では始まったばかりです。歯学部でも学生による授業評価、教官評価が必要となるでしょう。一方で、新潟大学歯学部に入ってほしい学生に入学してもらうことを目的に推薦入試、後期日程入試で面接を採用してきました。推薦入試の面接の経験が10年を超えました。それらを踏まえて前期日程についても、受験生が多くて大変ですが、今年度から面接を始めることにしました。

Glocalization :

国際化の流れはglobalizationとして歯科医学の分野にも及んできました。一方、localization は地方分権とともに大学にも地域と連携した役割が求められています。この双方の役割、すなわちglocalization を果たしてゆくことが歯学部にも求められています。早期体験実習の充実のなかで介護の体験実習も必要でしょう。幸い新潟県は高齢者が多くいっしょり、なおかつ村落に分散して住

んでいらっしゃると思いますので、ここで勉強できるメリットは大きいと思います。また、この際には地域保健、医療行政の学習も必要です。さらには新潟大学歯学部では臨床教授制度を推進することとし、8名の開業医の先生方にご協力をお願いしました。学生は生の歯科医療現場に出かけて、見、お手伝いをしながら、貴重な体験をすることにより、実際に患者さんが求めていることを知ることになります。地域に根ざしたボランティア活動を積極的に行うように指導するとともに、これらの地域での学習のすべてを単位とすることも考えなければなりません。

従来、新潟大学歯学部の卒業生は開業医の先生方に評判がいいと言われてきました。それはまじめでおとなしくて使いやすいということかもしれません。これからは、競争原理に則った強い学生を育ててゆきたいと考えています。

大学院 :

専門性の一層の向上をはかるために大学院歯学研究科を改組します。基礎系専攻と臨床系専攻を口腔生命科学系専攻とし、学生定員は1学年32名（4年間で128名）とします。現在は1年35名（9）、2年34名（9）、3年43名（8）、4年19名（4）計131名（30）（ ）内は社会人選抜大学院生、と定員を越す多くの大学院生が研究に従事しており、研究成果に大いに期待がもてます。

大学院改組の目的は、疾患の治療を有効に行うための研究を通して高度の専門職業人を養成することです。現在でも臨床系の大学院生が臨床的なテーマをもって基礎系の大学院において指導を受けており、成果をあげていますので、その精神を継承することになります。そして従来の基礎系も臨床系も一緒になって研究体制を組むこととなります。特に社会人選抜にあっては地域の一般開業医の日常臨床から生じたテーマにこたえる研究組織とする必要があります。研究指導はますます重要となってきますから、皆様のご協力をお願いします。一方で、高度の基礎研究も大いに推進させる使命をも改組された大学院は有しています。さらに大学院にあっては、環日本海・アジアとの

学術交流、全世界からの留学生のニーズに応える役割も担ってゆきます。

従来細分化されていた19講座をゆるやかな組織としての大講座とします。発達・社会歯科学講座、機能・制御学講座、形態・再建学講座といったところが、今、討議の対象となっています。講座の改組の目的としては、個々の研究テーマを積み上げることにより大きな、組織的な研究プロジェクトを発展させることが可能となるでしょう。さらに、これにより研究費、マンパワーを有効に利用することです。

三年次編入：

高い倫理観と強い使命感をもった歯科医師を養成するために4年制大学を卒業し、生物学を履修している学生を3年次から入学してもらいます。多様な人材を確保することができ、少人数制の学部教育にあってリーダー的役割を果たしてくれることを期待します。そのためには、たいへんな努力で編成された新カリキュラムが定着しつつあるにもかかわらず、再度現行の2年から始まる専門科目のカリキュラムを変更して3年からとします。それに伴って一般入試で入学した学生は、今のカリキュラムを変更して2年では、教養教育を重視しながら、高校で選択しなかった理科科目の補習、専門基礎などのカリキュラムを組みます。さらには放送大学、早期体験実習、ボランティア活動などを通し歯科医師として必要な人間形成をはかることとします。

メディカルスクール（4年制歯科医師養成専門学校）が話題にのぼりつつあります。これは現行の6年制歯学部とどのような関係になるのか、いずれ討議が必要になってくるかもしれません。

附属病院の改組：

これについては、河野病院長からいずれ詳しく説明があると思いますし、改組に向けての討議にはかなりの先生方が加わっておられますので、理解されている先生も多いと思います。総合診療部、診療科（口腔保健科、歯の診療科、噛み合わせ診

療科、口腔外科）特殊歯科診療部となるはずで、この改組の最大の目的は、患者さんのニーズに応じた診療体系とすることですし、それによって今まで以上に多くの患者さんに来院していただきたいと願っています。

地域社会との連携：

新潟県民・市民の生涯学習の場を歯学部として提供するためにはどのような活動があるでしょうか。また新潟大学歯学部を地域住民によく理解していただき、利用していただくとともに、歯科医学および歯科医療の内容をよりわかりやすく提供するための公開講座の形態とはどのようなものでしょうか。私たちが大学のなかにおいて、参加者に大学に来ていただくのではなく、私たちが地域に出かけてゆく出前講座の方が望まれる形かもしれません。社会人選抜大学院制度は地域の開業医の先生方にもう一度研究（再教育）の場を提供しています。臨床教授制度は地域の先生方に現場での教育をお願いするものであり、地域の人々が開業医という家庭医をどのようにとらえているかを実際に学ばせていただきます。放送大学の教養教育への利用も有効でしょう。新潟大学歯学部にも多数在籍している留学生による地域住民との国際交流も大切な役割でしょう。こうした地域との連携を通して新潟大学歯学部の広報活動を進めることができます。そして最終的に重要なことは、今まで行われてきた自己評価のみではなしに外部（地域からの）評価を受けることです。そのためには新潟大学歯学部は、構成員による十分な討論のなかから、研究、教育、臨床にわたる活動の目標を設定するところから始めましょう。

最後に、新潟大学歯学部の構成員の一人一人が過去のしがらみを捨てて新しい新潟大学歯学部を創造するという気持ちをもって進みましょう。21世紀の新潟大学歯学部をになってゆくのは私ではなく、若い皆さんです。歯学部内において熱心な討議を続けてください。